

人物紹介

戸田 忠雄

福岡女学院看護大学 徳永 徹

戸田忠雄先生は、明治32年、群馬県のお生まれである。第一高等学校を経て、大正13年に東京帝国大学医学部をご卒業。京都帝国大学微生物学教室を経て、翌年、満州医科大学へ赴任、微生物学教室で助教授、教授を歴任された。この間、「抗酸菌の研究」で学位（京都大学）を授与され、また「結核の研究とくに化学的ならびに免疫学的療法研究」のため2年間ドイツ（ベルリンのコッホ研究所とフランクフルトの実験治療研究所）に留学された。昭和11年に九州帝国大学教授に任命され、医学部細菌学講座を担当された。その後、医学部長を2期務め、また九州大学結核研究所長として九大結研の創立と充実に尽力された。

昭和38年3月に退官されたが、この40年の間、先生は微生物学の領域で数々の優れた業績を残された。その中核をなすものは、結核菌、BCG、らい菌を含めた「抗酸菌の研究」であって、その研究は常に世界でも指導的位置にあり、わが国における「抗酸菌学」は先生によって体系づけられたと言っても過言ではないであろう。

結核菌および抗酸菌については広範で膨大な研究があるが、なかでも大正15年より昭和3年にかけての抗酸菌の酵素の研究はきわめて独創的なものであった。たとえば、カタラーゼやウレアーゼが菌型鑑別に有用であるという知見などは、70年を経た今日でも有用なものであり、またウシ型菌鑑別のためのウサギ皮内接種法や、抗酸菌染色法としてのチール・戸田法などは永年研究者に愛用された手技である。結核化学療法にマウスを用いる試みや、非定型抗酸菌についての報告も、既に昭和18年に記載しておられる。

BCGの人体接種についても、今村荒男博士に次いで、昭和9年にその結果を発表し、続いて接種方法、液体ワクチンの保存と調整法、乾燥BCGワクチンの研究を行い、現在の優れたワクチンの基礎を築かれた。世界でもっとも早く経皮接種法と乾燥BCGワクチンの研究に着手した研究者の一人であったことなどは特筆すべきであろう。

一方、ツベルクリンの各劃分の精製と生物学的性状についての研究は、結核とアレルギーとの関連について、



斯界に種々の新知見をもたらすものであった。

また、らい菌の生物学的性状および培養についても数々の業績を報告されており、たとえば、光田反応の抗原としてメタノール抗原の精製に成功された。

抗酸菌の電子顕微鏡的研究においては、常に世界をリードする立場にあり、細胞壁、原形質膜、核、ポリリン酸顆粒、リボゾームなど、ほとんどすべての構成単位についてその微細構造を初めて明らかにすることに成功された。

また抗酸菌ファージをわが国ではじめて分離し、その生物学的性状や増殖機構を明らかにし、抗酸菌ファージ研究を最初に体系づけられた。

このほか、ウイルスに関しては Dengue 熱ウイルスに関する優れた業績がある。

これらの研究業績が優れたものであることは、結核予防会総裁賞（昭和24年）、西日本文化賞（昭和26年）、朝日文化賞（昭和31年）、医学武田賞（昭和37年）などの

数々の受賞からも充分うかがうことができよう。

研究だけでなく、教育や後進の指導においても先生は熱心で、微生物学教科書としての「戸田新細菌学」は全国でも広く用いられ、現在もなお多数の弟子たちによって毎年改訂が行われている。このほか「結核菌とBCG」や「抗酸菌の研究」など、抗酸菌関係の著書も、今日なお一読の価値を失わない。

戸田一門は、全国的に多数の微生物学教授を輩出したが、その同門会は、先生によって青藍会と命名され、故武谷健二先生以下、多くの抗酸菌研究者、微生物学者を擁して今日に至っている。

先生は昭和56年3月20日、81歳で急逝された。先生はお身体も大きく頑健な方で、学生時代、全国大学陸上競技会で400メートルで優勝されたこともあり、800メートルでは2分6秒の記録を出されたこともあった。

また同時に風流な方でもあり、河畔子と号して俳句にも堪能であった。句文集「学問の目」（昭和34年）を残しておられる。先生が医学部長や学術会議会員などご多忙のころの作品を紹介して、終わりたいと思う。

学問の目に遠山火ありにけり

学守る心にて去年今年なく